

『エフィ・ブリスト』の現実のかたち

——社会の中の人間，人間の中の社会——

尾 方 一 郎

十七歳の少女に，三八歳の有能なプロイセン官吏が求婚，いや，正確に言えば少女の両親を通して求婚した。『エフィ・ブリスト』の物語はここから始まる。その日のうちに婚約は成立。だがまだ若いエフィには出世街道を歩む彼と結婚することの実際の意味が分かっていなかった。それどころか彼に漠然とした恐怖さえ抱いている(35)⁽¹⁾。それでも夫の地位と能力を優先させ，結婚に同意したのだった。それにまつわる不安は「乗り越えられるだろう」(21)と考えつつ。

結局結婚生活は破局に終わり，エフィは早世する。物語の最後，エフィの墓を前にして「やはりあの子は若すぎたのではないでしょうか」(295)と母親は述懐し，自分たちの責任を思うが，そこへと導く歪^{ひず}みは最初から余りにも明らかに『エフィ・ブリスト』の場を規定しているのだ。

1 作品の現実

歪みを貯えたこの世界は，しかし，不倫という主題も含めてむしろ平凡であり，かつ日常性に満たされている。家族や友人同士の会話といった情景，ごく内輪の場面が前景を占め，インシュテッテンが有能な官僚として機能している国家機構のような大きな世界，またエフィの結婚式や出産というような非日常的な場面はあえて見過ごされる。

この日常は自由な意志による行為の場だろうか。ある意味ではそう言えよう。ここには自分の意志によって人々を強烈に方向付けていく個性，例えば『イエニー・トライベル夫人』のイエニーのような人物はいない。また彼らが自らの意志を犠牲にすべき全体的危機の下にあるわけでもない。破局に至るまでにそれぞれの人物が別の道を取ることはつねに可能だったのだから，彼らは自由であったと言ってもよい。

だがそれにもかかわらず実際には、すべて彼らの意志は敗北した。ただ何か見えない力に引かれるように動いただけであり、その力の前に意志は挫折し、目的をはずれ、あるいは目的そのものを失った。

この力はあたかも自然的・運命的なものに見える⁽²⁾。その力の由来するところは、動かされる人々から見れば〈現実〉とでも呼ぶしかない。だがこれは単一のものとしてこの世界を支配するのではない。彼らは、一つの空間にいながらそれぞれ異なる現実を見て、その現実突き動かされて生きている。

仮に単一の現実があるとすれば作者のものだが、それはいわば多様な現実を多様なままに眺めるだけである。作者フォンターネのリアリズムを考えるとすればそれはこの視線のありかただろう。リアリズムはしばしばシニカルな批判性と組になるが、ここにあるのは肯定性であり、様々な現実の存在と、存在の権利をそのままに認める。そして『エフィ・ブリースト』が最晩年のものとして、同じ作者のそれ以前のものから際立つのはこの肯定性の点においてである。

ただしこの現実肯定はペシミスティックでもある。現実の存在を世界のあるべき姿の実現とみて受け入れ、あるいは人間の理性的な理解をまったく超える事件を神の予定と考えるならば、それは失われた統一性を求めるユートピズム、あるいは目的論的なオプティミズムと言えようが、それではない。人々の現実や行為がそれぞれ対照され、相対化され、等しなみのものとして視線を浴びるのみである。ここにあるものをあえて名付けようとするならば、イロニーとでも言う他あるまい。しかしそれもまた構成的な原理ではなく、結局は反省的にしか見出されないものであり、つまりは我々が作者という人格の統一を求めた結果なのだ。

2 さまざまな現実の像

それぞれの人物はそれぞれの現実を持ち、現実それぞれに歪みを内包する。世界の歪みはその総合である。しかしそれは個別のもの単純和ではない。個の現実是他者のそれに深く影響され、相互作用の蓄積は全体を大きな力の場で覆っていく。ここではそのありさまを個別の側から見ていく。そしてさらに、この物語の崩壊過程に一見外的なもの、挿話的なものとして介入してくる幽霊という像が、実は人間の現実に深く関与するものと一体であることも見る。

2.1 エフィ

エフィという女性は、まさに童女のような無邪気さ（それが夫にも我々にも魅力的なコケットリーと見えるのだが）と、社会的名誉心の同居した姿で現われる。子供としては自然かもしれないこの混淆は、しかし結婚によって矛盾に陥り、彼女の現実を引き裂くことになった。第一の、彼女が情動的に本来の居場所とする現実とは情動的現実とでも呼ぶことができる。そこではごく主観的な期待、あるいは恐怖などがたとえ全く内発的なものであっても具体的な現実性をもつ。これに対するのが、社会的現実と言われるような外なる現実である。これは主観に対して、外から〈すでにあるもの〉としてやってくる。

郷里ホーエン・クレメンでのエフィの世界は、この情動的現実の中にあるとってよい。外なる現実を吸収し集約する親の庇護によって調和が支えられ、社会とはせいぜい、領地持ちの貴族の父をもつ自分と、周囲の友達の間にもみ込まれるものだった。この世界を出て結婚生活に入るエフィは、インシュテッテンとの生活も以前の延長のように考え、夫のもたらす外なる現実が自己の内の現実にドラスティックな変革を迫ることを予期しなかった。しかし構図は崩れる。

夫の任地ケッシンで迎えた最初の朝にもう衝突が起こる。彼女は前の晩、屋敷の二階から聞こえる物音に不安を抱き眠りを妨げられた。二階の換気のため開けてある窓から風が入り、カーテンが床をこすのだと聞いて、頭では理解しても恐怖が去るわけではない。「床の上を靴を引きずる音を聞いているようで、誰かが踊っているんじゃないかと思って、音楽まで聞こえそうだった」と言い、カーテンを切るか、せめて窓を閉めるよう夫に哀願する。これはまさに彼女の主観が否応なしに構成する情動的現実から生まれた願いである。しかし夫は、一旦はカーテンを切ろうと言うものの、「だがまあ急ぐまい。ましてそれで解決するとは限らないんだから」と言って結局取り合わない(58)。彼女の願いは、夫のもつ別の現実に突き当たる。

次いでその約半月後、インシュテッテンがビスマルクから招待を受けた夜、エフィは一人寝の恐怖の余り夜中に中国人の幽霊を見たと言って女中を呼ぶ。翌朝エフィは、もう夜に家を離れないように夫に頼むが、彼はそんなことができるはずのない自分の立場をこんこんと説明する。夫の出世を思うエフィは説明を受け入れるが、それなら他の家に移ろうと言いだす。だが夫にしてみればそれは物笑いの種で、自分の将来を危うくすることであるから到底不可能であり、結局「そんな奴がいなくても、口で言うことは誰でもできるよ」(79)と、それこそ現実的・常識的な説明を押し通すだけである。

インシュテッテンにとって自分の現実には自明な客観性を持っており、エフィの心情的現実が発する波によって共振することはない。勿論インシュテッテンも、エフィが落ち込めば遠乗りを誘ったり、やさしい言葉をかけたりする家庭人としての配慮を欠いてはいない。だがそれも自己の現実の〈対象〉としてのエフィに向けられるものに他ならない。自分にとって全く現実的でない幽霊への恐怖などは迷妄とし、単に現実を共有しないだけでなく、共有しないことに痛痒を感じず、自らの現実で置き換えようとする。この態度こそがエフィには理解できないものであり、恐ろしいものでもある。だがエフィを求婚に応じさせたのは彼の野心であり、野心は彼の現実の論理に支えられているのだから、その論理に反発できないこと、彼の態度も耐え忍ばねばならないことも彼女はよく理解している。この二律背反がエフィの現実を食い破ってくる。彼女は夫への恐れから目をそむけることになるが、まさにそれゆえに恐れは幽霊という像を伴って固着する。

2.2 現実の空洞

エフィを脅かすものは、インシュテッテンの背後にある未知の部分とも言える。エフィの思考は彼の合理的説明を、合理性ゆえに受け入れる。だがなぜ彼が合理的説明を自分に押し付けるばかりなのかという疑問、彼女にとってより根底的な疑問には、主体的思考が納得する答えを見つけることができない。

この欠落は彼女の現実空間の一角に場を占める。そこは事実の存在ではなく、欠如の認識が先行する空洞部分であり、欠如であるがゆえに強烈な引力を発する。それは、例えば庭の四隅のうち三つに石像が建ち一つが空いているのを見た者が、残りの一隅に感じる何ともいえない欠如感である。この引力に引き寄せられ空洞に受け入れられるものはまた、現実を統一的に拡大するはずである。だがエフィはそこを埋めるものを見出せず、欠如感だけが現実空間を歪ませている。

ここに一人の男が近づいてくる。夫の昔からの知り合いでもあるクランパス少佐である。彼は自己の内面に意味を見出すことができず、したがって世界に意味を認めることもできないタイプの人間である。しかし、というよりそれゆえに、彼の外面は軽薄と皮肉を交えてひとを刺激し、他人との関係の中にも何かしらの意味を作っていくようにする。だが彼の内面の空虚は、安定化した関係をすぐさま無意味に陥れるから、関係は常に変転するものでなければならない。それをひとは「無責任」(123)と呼ぶ。

一方エフィも、田舎町ケッシンでの退屈な生活にすっかり倦んでおり、自己の現実の内発的に意味付けすることが難しくなっている。あるのは郡長インシュテッテンの

妻という名誉ある立場だけだが、これは社会的現実が付与する形式的な意味にすぎない。ここから自己の現実を再構成するという課題はインシュテッテンの現実を積極的に捉えていくことを前提とするが、これこそエフィが欲していながらできなかったことだった。

ここに現れたクランパスの虚無的な自由主義は、結婚とともに周りを埋めてきた硬直性に窒息しかけている彼女にとって、その外を垣間見させるものであり、少なくとも最初は歓迎された。だからこそ屋敷の幽霊の話も打ち明ける気になったのだが、これに対して彼は、インシュテッテンには以前から幽霊を一種の箔付けに使う傾向があったことを教え、無関心の第一の理由とする。そしてエフィの求めに応じて二番目を付け加える。

「[...] インシュテッテンは何を犠牲にしても、必要なら幽霊を持ち出しても出世したいという熱望の他に、もう一つの情熱を持っています。彼はいつでも教育的にやろうとする生れつきの教育者です。[...]」

「それで私のことも教育しようと？ 幽霊を使って？」

「教育という言葉はあたらないかも知れませんが、まあ回り道的な教育です。」

「よく意味が分かりません。」

「若い妻は若い妻で、郡長は郡長です。郡長が郡内を馬車で年中まわると、その時は家には一人残って誰もいない。だがそういう幽霊は剣を持ったケルビムのようなもので……。」(133)

随分失礼な意見で、エフィは話をそらせるが、そういう見方も成り立つことには気付く。そしてその見方は夫の態度の裏にあるもの、彼女の現実の空洞部分にあてはまる像をたてる。彼は〈不倫の可能性〉を意識しているのだと。

もちろんこれが本当にエフィの空洞を補うべきものかどうかは誰にも、なにより彼女本人にも分かるまい。したがって帰宅後、「残酷と言ってもいい」と夫に怒りを感じはするが、その直後「私は子供みたい。クランパスの言うことが正しいなんていったい誰が保証してくれるの」と思いなおす(134)。だが一瞬でも怒りを感じたことは、それが直観的に納得させる見方だったことを裏書きする。自分たちを「若い妻は若い妻で、郡長は郡長」と一般的文脈から考えてみれば、確かにそう見られても無理はない。そして夫の意識にあるとしても、その可能性自体を口にしないのはこれも当然である。

またこの可能性は、彼女自身の内なる情動に方向を示すものでもある。そのため認

識自体が禁じられており、意識の底に抑圧されねばならない。エフィの現実空間にはまた目をそむけるべき一角ができ、新たな幽霊が押し込められることになる。

だがそれは、その後エフィと夫が友人たちと共に招待された村で降りだした雪をきっかけに引き出されることになる。既にエフィに秋波を送り始めていたクランパスが、「このまま降り続けると、私たちはここで雪に閉じこめられてしまいますね」と話しかけると、エフィはそれは悪いことではないとこたえ、「私はむかしから、雪に閉じこめられるということに、ある優しいイメージを、保護と援助というイメージを結びつけているんです」と言う。続きを求められた彼女は『神の城壁』という詩の話始める。

「[...] どこかで戦争があって、冬の戦いでした。ある年とった未亡人が敵をとっても恐れて、神様に祈ったんです。くのに敵から身を守るために『私の周りに城壁を作ってください』と。すると神様はその家を雪に閉じこめて、敵はそこを通りすぎていったんです。」

クランパスは目に見えて動揺し、話題をかえた。(151)

ここで二つの現実が切り結ぶ。雪を、クランパスは二人を社会から隔てるイメージに用いるが、エフィは恐ろしい他者から自分の世界を守るものに転じる。だがエフィを脅かすのは強引なクランパスだけではなく、それに反応してしまう自分の情動でもある。その存在を認めることもできず、といて押し殺すこともできない以上、実際は城壁を作ること、その中に安住することも不可能である。だが彼女は他にすべを知らず、結局目をそらすしかできなかった。その結果、帰途に偶然クランパスと二人で櫓に乗ることになっても断れず、目を閉じ手を合わせて神に城壁を願っているうちに、その手をほどかれクランパスの接吻を許してしまう(162)。

夫からも自己からも目をそむけ続けたことで、彼女は現実の完全な閉塞という代償を払うことになった。ぬきさしならぬ関係になり、日々虚偽と後悔を積み重ねるエフィは、ある日インシュテッテンがベルリンに転勤する話を聞いて激しい反応を示す。

突然彼女は椅子からインシュテッテンの前にくずれおち、彼の膝をだいた。そしてまるで祈るような声で言った。「神様、ありがとうございます！」

インシュテッテンは顔色をかえた。これは何だったんだろう？ (183)

エフィの „Gott sei Dank“(ありがたい) という言葉は文字通り神への感謝となり、夫を驚かさざるをえない。夫の不審を感じ取ったエフィは、恐れ続けた幽霊屋敷を離れられることが本当にうれしいのだと説明するが、それは幽霊であって幽霊でない。

あってはならないのに存在し、したがって認識の奥に押し込めねばならないものこそが彼女を脅かす。そして、それを日々認識せずには済まされないというより根本的な恐怖から、ここで解放されたのだ。しかし今度は、エフィの説明を一応受け入れながら本当に納得はできなかったインシュテッテンがエフィの背後に未知の部分を見て、彼の現実空間に空洞が生じた。その引力が六年半後にかつての関係を知った彼を、翌々日の朝には決闘が終わるほどの敏速な行動へと駆り立てたのだった。

2.3 インシュテッテン

エフィが「若すぎた」のは事実かもしれない。だが、インシュテッテンがエフィの現実を理解して彼女の世界を守ってやる事も不可能だった。それは彼の側の現実がプロイセン社会の客観的現実だったからではない。

彼にとっての現実の姿は、クランパスとの決闘前後の言動に如実に現われる。決闘の相談を役所の友人に持ち込んだ彼は言う。

「[...] しかし人間が一緒に生きている以上、そこには〈何か〉ができています。それはとにかくそこにあり、我々はその条項にしたがって、すべてを判断することに慣れてきました。他人も、自分もです。そしてそれに反してはやっていけません。社会が我々を軽蔑し、しまいには自分でも自分自身を軽蔑します。そして耐えきれずに、自分で頭に弾を打ち込むこととなります。[...]」(235 f.)

この〈何か〉は社会的現実と言ってもよいだろう。これは既にあるもの、客観的なものとして個人の行動や判断を基礎付ける。しかし〈何か〉が「自分で頭に弾を打ち込む」まで必然とするならば、そこにはやはり極端さがあり、それでもなお「とにかくそこにある」と言うならば、〈何か〉の内実の客観性は疑わしい。「社会が我々を軽蔑する」というのも、〈何か〉が生むと見えながら、彼自身があらかじめ構成することかもしれない。実際、この話を自分の胸に秘めておくから決闘を避けられないか、と尋ねる友人に対するインシュテッテンの返答は、疑いを強める。

「[...] もしあなたが秘密をまもって他人に完全に沈黙して下さっても、あなたはそれをご存じです。……この瞬間から、私はあなたの同情の対象であり、そうであり続けます——これがもはや気持ちのよいことではありません。そして、私が妻とかわす言葉は、あなたがお聞きになっている限り、あなたに制御されることとなります。あなたが望むと望まざるとによりません。そしてもし家内が貞節

について語ったり、女たちがよくするように、誰かを批判したりしたなら、私には眼のやり場がありません。[…]

 (237)

他者の現実が自己の現実の中であらかじめ構成される。もしかすると主観でしかないものも客観世界に投影され、すでに有るものとして自己を束縛していく。この点で彼はいささか極端かもしれない。だが、その客観的と見えるものに対しての彼の態度は、必ずしも硬直した原則主義者のようにそれを絶対化し、疑いを持たずに奉仕するというわけではない。決闘からの帰途の自己省察。

「そう、私がもし恐ろしい憎しみで一杯だったのなら、もし心底から復讐してやりたいと感じていたのだったら……復讐は美しいものじゃない。でも何かしら人間的で、人間としての自然な権利といえる。だが今回のはみんなある観念のため、概念のためだった。作り上げたお話、半分は喜劇だった。そしてこの喜劇を続けて、エフィを送り返さねばならない。彼女を破滅させ、私もまた……。[…]

(243)

インシュテッテンは、自分の従う社会的現実が「観念」であることを理解し、対象化する。だがその観念から逃れることはできない。これは彼が客観的な社会的現実と等置する自己の現実が、実はエフィの心情的現実と同等のものになっているからに他ならない。かつてクランバスが法の遵守の退屈さを口にしたとき、「君はすぐ天が崩れ落ちてくることはないと思っている。確かにすぐには起こらない。だがそのうちそうなるぞ」(129)と警告したのも、単なる修辭的誇張ではなく、彼には現実がそう見えている、すなわち相当程度に主観的な現実を見ているのである。しかし彼にとってそれはあくまで客観的であり、だからこそ強固である。そしてこの強固さに彼の自己も支えられている。だが、世の中には無秩序と迷妄と軽薄が、彼にとっては幽霊と同様ありうべからざるものが存在し、彼の現実を侵してくる。これに対して彼は、周囲を啓蒙し自分の現実を外部に実現するか、外の現実を目を塞ぐことしかできない。(したがってエフィの異常な言動に疑問を抱いても容易に説得されてしまう。)そして自己の現実が決定的に脅かされたときには、天ならぬ自己が崩壊することへの恐怖から、「観念」による秩序回復に全力を挙げ、自らやエフィの人間としての立場は二の次とせざるをえなくなるのである。

2.4 ホーエン・クレメン

インシュテッテンの現実を引き裂いていたもう一つの大きな力がある。エフィの背後に常に見え隠れする故郷、ホーエン・クレメンである。この土地こそが、彼を反対側から脅かしていたと言える。

物語の中で「ホーエン・クレメン」という名が呼ばれるとき、何と魔術的な響きを持つことだろう。ケッシンに着いて間もなく、土手にのぼってこの故郷へと向かう急行列車を見送るエフィに「一緒に行きたいかい」と尋ねたインシュテッテンが彼女の眼にみた一粒の涙は、なんと痛切なことだろう(89)。このエフィの心情的現実の中心をなす土地はしかし、彼にとってはある不安を生む場所、エフィをそこから引き離すべき場所であった。

不安のきっかけは、エフィの家を訪ね、結婚の申し込みをした直後にあった。庭で仲良し三人と遊んでいるところを呼び入れられ、求婚の話を聞かされて茫然としているエフィの前に、隣の部屋から父に伴われてインシュテッテンが入ってくる。インシュテッテンがお辞儀をし、エフィに近づいてくる。その瞬間、近所で一番のお転婆娘、ヘルタが窓からのぞきこんで、「エフィ、おいで」と言ったのだ(18)。ヘルタの頭はすぐ窓から消え、窓の外の子たちの笑い声だけが残る。しかし婚約を決めた祝いの食卓の後、インシュテッテンの耳にはこの言葉が響く。エフィの父の話に相づちを打ちながらも、もう一度窓の外からこの声がしそうな気がしてならない。この小事件はどうしても「ただの偶然」とは思えなかった(21)。

極めて儀礼的・社会的な場面へ介入した突然の内輪の声、「エフィ、おいで」。彼にとってのホーエン・クレメンの像はこの一言に集約されているといってもいいだろう。エフィの故郷は、彼女を自分の現実圏内に引き込みたいインシュテッテンに抗し、不可解な引力を及ぼしている。エフィにとっての引力はおそらく、彼女が妻となり母親となっても、故郷に滞在する時は両親の子供でもありつづけ、結婚前の世界がよみがえることに基づく。しかし引力は彼自身の現実を動揺させるものでもあった。エフィの母と同年のインシュテッテンは、昔は母の方と結婚を考えていたようだ(12)。しかし彼女が当時既に名士貴族だったエフィの父フォン・ブリースト氏と結婚してしまっただけの彼は、猛然と法律の勉強をし、ついにはビスマルクのお気にいりとして、若さに似合わぬ出世をしていた。その年月の間に堅固になったはずの現実、それをホーエン・クレメンは揺るがす。堅固なはずの世界の、別の見え方を開示しかねないのだ⁽³⁾。

これを恐れた彼が、エフィを「教育」する方針を固めたとしてもさほど不思議はな

い。エフィの幽霊を放置したのもこの教育のためだったかもしれない。「生まれつきの教育者」というのは自己の現実に固執し、相手の現実を強引にではなくとも着実に置き換えようとする人間だったのだ。しかし本当に強かったのはいずれの現実だったろう。

結婚が破局を迎えた後、帰郷も許されず失意のうちにベルリンで暮らすエフィが病を得たことを医師から知らされた父親は、母親との問答の末に言う。

「子供がいないのもつらいよ。それに『世間』というものは、ルイーゼ、その気になれば片目をつぶってくれるだろう。ラーテノウ連隊の連中が訪ねて来てくれればよし、来なければそれもよしと思っているのだ。本当に簡単に電報を打とう。『エフィ、おいで』とね。賛成してくれるかね。」(277)

結局ホーエン・クレメンは、「エフィ、おいで」ということば、インシュテッテンを脅かしていた魔術的引力によってエフィを「子供」として連れ戻した。もっともそこも、もはやあらゆる望みがかなえられる魔法の庭でなくなってはいたが。

3 現実の構造

ここまで『エフィ・ブリスト』の人々の現実の個別性を、エフィとインシュテッテンを中心に見てきた。それぞれの人物はそれぞれの現実の場が持つ力につき動かされてふるまう。もちろん彼らの現実には単に主観的なものではない。他者との関係の中に作り上げられるものとして客観的でもある。だがまたそれらは社会的と見えるものであっても、インシュテッテンの場合にも如実に現われたように、やはり個的な主観性をその場とする。

フォンターネの小説はしばしば社会小説と呼ばれ、その問題性は個人と社会との間のもものとされる。この小説や『迷い、もつれ』、『イエニー・トライベル夫人』など、題材を作者にとっての（やや広い意味での）同時代のプロイセンにとった場合、作者の見るプロイセン社会が個人の前にあると見える。それは人間の現実が何らかの外的な、我々から見れば歴史的な要因によって形作られねばならない以上は当然であろう。だが別の観点からすれば、この物語で個人が直面するものは、〈プロイセン社会〉という言葉が我々に想起させるような歴史的・客観的存在であるより、むしろ自己あるいは他の個人の内面の現実という主観的なものである。このことは日常の場を主な舞台にすることで特にきわだっている。そこに現われる問題は個人的・内的であることで、

かえて歴史性を超えたものでもある。だとすればこの小説を考えることは、社会という言葉をも再考させる。

と同時に、個人という言葉も見直されねばならない。十九世紀という時間的場では人間は個人であり、そして個人とはその言葉が使われる以上近代的意味のもの、すなわち成熟し、自分の責任で判断し行動し、社会に対峙するもの。このようなことが暗黙裡に前提され、あるいは願望像として先行していないだろうか。むしろこの小説での問題は、個人対社会という枠組みの中より、この枠組みが成立しているか否かにあるのではないか。

例えばエフィ。彼女をこのような自律的個人と見ることはできまい。彼女は結婚し、子供も生んだ。その意味では成人であり、しかもインシュテッテンの妻として、社会的には一目置かれるべき存在でもある。しかしそれはあくまで外的条件であり、内発的な自律性といういわば倫理的な個人性の規定であるものとは無縁であった。またそもそも彼女自身にそのような形で社会と関係しようという意識があったとも言いがたい。

ではインシュテッテンはどうか。彼は自分では、独立した個人として社会を理解し、エフィをも導いていると考えていただろう。だが小説の終り近く、失われた幸福に気付いた彼が役所の友人に吐く次のような言葉は彼自身の問題を露呈する。

「[...] ここを飛び出して、文化や名誉のことなど知らない黒人の中に入っていくんです。この幸せな連中の所にね。というのもこういうごちゃごちゃがすべて悪いんですから。情熱から——結局はこれが残るんでしょうが——こういうことをする人なんてのはいない。つまりただの観念のためなんです……誰かが何かやると、自分もそのまねをする。そしてだんだんひどくなる。」(288)

彼が見る対象をひとまず〈社会〉と呼ぶならば、批判は右へならえ式の社会の一つの行動様式に向けられている。しかしこの批判はまだ社会を無条件に実体化し、主観性を度外視する。この社会を否定して「黒人中」の方を理想化しそこに幸福があるなどと思うのは、単純なユートピズムであろう。この批判が有効にならないのは客体として存在する社会とその中の自己という図式でのみ自己と社会の関係を作り上げ、それを前提に地理的境界の外からはその社会の批判が可能だとみなすからである。しかし実際には、そこで批判される社会はかつての彼にとって絶対權威であったそれと同じく彼の主観の中に構成されており、彼の態度が服従から反発に転換しただけである。

この点でインシュテッテンもまた十分な意味で個人ではない。もし、自立して自由な判断力をもつ個人が〈社会〉との関係を築いていくことが近代の課題だとすれば、まだその課題を果たしていない。というのは、上のような社会の実体化によって、自己の現実の場の力に動かされることを社会的必然とみなし自己の非自律性を隠すからである。すなわち彼が、社会に対して関係を築く、と言えるほどに社会と、そして自己とを把握せず社会から独立もしていないからである。エフィがホーエン・クレメンの子であるように、彼はいわば社会という親の子なのだ⁽⁴⁾。

したがって彼の課題は、自己の現実をまず自己のものとして把握し直すことだろう。それは社会と見えている現実を、自己の外にある客体として把握するだけでなく、自己の内的なものとしても認め、かつ内的に乗り越えるということである。それによって初めて、彼の見る社会も社会の名に値するようになり、社会への批判が成り立つと共に、社会と関係する自由な人間が生まれるはずである。

上の発言への友人の答えは一見、社会という論点を離れるごとくである。だが実はこの課題を果たそうとするものであろう。

「何を言うんですインシュテッテン。そんなのは気まぐれかおもいつきですよ。アフリカを横断してどうなるんです。[...] ただここに残って諦めを学ぶんです。ふさがずに済むものがどこにありますか。『本当はずいぶんあやしい話だ』と毎日思わずにいられる人がいるもんですか。[...] 城壁の破られたところに立って、倒れるまで踏みとどまる。これが最善です。でもその前にはささやかな、本当にささやかなものの中でできるだけのものを見つけていくんです。すみれが咲いたり、ルイーゼ妃の記念碑が花に埋もれていたり、ブーツをはいた女の子たちが縄跳びをしていたりすれば、それを見る目も養うんですよ。[...]」(288)

我々が社会的現実を内的に乗り越えるとは、無前提的に置かれる〈社会〉という公準、そこに築かれる体系の中の判断から一旦自由になることである。もし現実をユートピア的に期待される理念で染め上げていたならば、その理念も見直すことが自律の基礎である。体系を揺り動かす梃子として、ここでは自然や身近な風景、しかもごくささやかで当たり前なものが提案される。これらに別の価値を見出すことで別の現実を見出し、〈社会的〉現実の絶対性を剥ぎとることで、その現実からの自由も獲得しようとするのだ。

「諦め」と言われるこの転換をインシュテッテンが行ったかどうか、我々読者が知ることはできない。だがその代わり、もともと社会的現実と遠く、それゆえに社会的現

実の手荒い洗礼を受けねばならなかったエフィが、かえてこの現実把握の転換を果たしたことを我々は知ることになる。物語の終わりに故郷に帰ったエフィの生活。

彼女はいろいろな家の仕事を引き受け、飾り付けや家事のちょっとした改善などにも心をくばった。[...] 静かに、だが魅惑されるように自然を眺めるすべを学び、プラタナスの葉が落ちるとき、小さな池の氷に日の光がきらめくとき、そしてまだなかば冬のままの円形花壇にクロッカスが咲き始めたとき——そんなとき心の安らぎをえて、そして何時間もながめ続けて、人生が彼女に拒んだもの、もっと正確に言えば、彼女自身が自分から奪ったものを忘れることができた。(279)

かつての社会的野心を決定的に断念させられた彼女には、まさに自然や身近な物事をそれ自体として見るまなざしが現われる。そしてそのまなざしは自分自身をも捉える。

「ねえ、わたし、あまり本を読まなかったでしょう。インシュテッテンがよく不思議がっていたわ。あの人には変に見えたのね。」

エフィが、インシュテッテンの名を口にしたのは初めてだった。母親をどきりとさせ、終わりが近いことをはっきり悟らせた。

「ねえ、あなたは」フォン・ブリスト夫人は言葉をはさんだ。「何か言いたいことがあったんじゃないの。」

「ええ、ママが私はまだ若いということを書いていたから。でもかまわないの。まだ幸せだったころ、インシュテッテンが晩になると本をよんでくれた。あの人いい本をたくさん持ってて、その中にこういうのがあったわ。ある人が楽しいパーティーの途中で呼び出されて、それで次の日その人が、そのあとどうだったかとたずねたの。そしたらひとがこう答えたんですって。『ええ、まだいろいろありました。でも結局あなたが何かをのがしたということはありません。』ねえママ、この言葉が忘れられなくなったの——少しぐらい早めにパーティーから呼び戻されても、それは大したことじゃないわ。」(293)

エフィが自分自身を自然の営みのなかにおき、その全体を現実として眺めるまなざしを獲得したことが語られる。かつて彼女は借り物の現実の中で暮らしていた。それは自己を持たないということだった。いま彼女は借り物から自由になり、自ら現実を形成する力を得て、それによって自己を形成することを得た。それには自分の現実を

外から眺めるまなざしを必要としたが、それは挫折と、目前に迫る死によって初めて得られたものだった。このまなざしはまた、他者の現実の理解も促し、彼女はついに心の中でインシュテッテンと和解する (293)。死という契機こそ、決定的に自己が自己の外に出、自己の現実の外に出るために必要だったのかもしれない。

この物語を語るフォンターネのまなざしは、あたかも自然の営みを、草が芽吹き枯れていくのを眺めるように冷静であり、すべてを等しい光のもとで見る。自己が終わることを知って、初めて自己が得られるというのは人間にとって悲痛な逆説だが、その逆説もそのままに描き出す。この姿勢が初めに述べたペンミスティックな肯定である。現実が悲劇的であっても、特定の個人や社会に悪を求めることも理念に基づいて審判を下すこともできない。もし問題があるとすればそれは全体の問題であり、救うべき手段のない運命である。現実のこのような姿を描き出すのが『エフィ・ブリースト』のリアリズムだろう。

その救いのなさにもかかわらず、彼はエフィの生を、彼女の自己の現実の破綻と乗り越えを我々に突きつけ、それを肯定する。我々がそこにイロニー以外のことを見て取れるとすれば、それは彼が自己の生と現実を直視し、ペンミスティックにならざるを得ないながらも、なおあくまで肯定するということ、そしてここでの肯定に自分が生きていることの意味を認めようとしていることだろう。そして我々がフォンターネをそう見るとすれば、我々もまた自己の生に意味を見出すことが可能になるだろう。

注

1. 『エフィ・ブリースト』の引用は次の版により、本文中にページ数のみ示す。
Theodor Fontane: *Effi Briest*. In: Werke, Schriften und Briefe, 2. Aufl., Abt.1, Bd. 4, hg. von W. Keitel und H. Nürnberger, München (Hanser) 1974, S. 7-296.
2. この作品を心霊術的交流の結果書かれる文字になぞらえ、ふだん創作につきものの労苦がこの場合にはなかったとする作家の自己申告は、もちろんそのまま受け取ることにはできないにしても、作品の場を支配するのがいわば自然的な力のように見えることの一つの感想とも言えよう。Vgl. *Brief an Hans Hertz, am 2. 3. 1895*. In: a. a. O., S. 701.
3. したがって、インシュテッテンはホーエン・クレメンとの交際をあまり持たない。ホーエン・クレメンに立ち寄らないことについては、例えば S. 120 参照。手紙を書かないことについては、S. 246 参照。
4. 父インシュテッテンの言葉を忠実に繰り返すアニーは、その多少戯画的な再現といえよう (S. 274 f.)。